

# セルビア共和国乳がん早期発見機材整備計画準備調査に参加して

松 本 俊 郎

大分大学医学部放射線医学講座  
matsushu@oita-u.ac.jp



## はじめに

セルビア共和国といっても正確に場所を言える日本人は一体どれ位いるだろうか。私の子供はアフリカの一角にあるものと信じきっている。サッカーの世界カップ直前の強化試合で日本と対戦（3対0でセルビアの大勝）して、国名だけは耳にした人が増えたかもしれない。実は、私もセルビア共和国を訪問する前は、旧ユーゴスラビアから分裂した国であることは知っていたが、正確にどの場所で、首都はどこか、どのような人種で構成されているのか、全く知らなかった。

今回、当講座の森教授から、「JICAからセルビア共和国乳がん検診に関するプロジェクト（正式名はタイトル参照）の現地調査依頼があったので、技術参与として参加してくれないか」と声を掛けられた時、正直言って戸惑ったが、心と裏腹に「喜んで行かせて頂きます」と即答したことを記憶している。実は、最初に当講座の岡田講師（胸部・乳腺の画像診断が専門）に打診があったが、国際学会に出張のため参加できず、幸か不幸か、私にお鉢が回ってきたのである。

それから、十分な下調べをすることもなく、2009年6月8日に第1回目の現地調査のため日本を旅立った。実は、第一次調査（6/8-6/17）に続き、第二次調査にも同年の11月（11/9-11/20）に参加し、その際は大分大学

医学部附属病院の村上診療放射線技師長と一緒にであった。

## セルビア共和国の概略

セルビア共和国の歴史は複雑であり、紙面の関係上もあり、概略を紹介する。セルビア共和国は第二次世界大戦中にナチス・ドイツの占領下となり、終戦後の1944年にチトーを首班とするユーゴスラビア社会主義連邦共和国（6共和国【スロベニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、セルビア、モンテネグロ、マケドニア】で構成）が樹立した。

1992年に悪名高きミロシェビッチ大統領が戦犯法廷拘置所で謎の死を遂げたのち、旧ユーゴの崩壊が進み、モンテネグロ共和国と共にユーゴスラビア連邦共和国が設立された。その後、1999年にコソボ紛争が勃発し、NATOによる空爆を受ける（写真1）。さらに、2006年にはモンテネグロが、2008年にはコソボが独立し、現在のセルビア共和国に至っている。

セルビアの首都はベオグラード市であり、セルビア語で“白い街”を意味するらしい。旧市街地は石畳がきれいに敷き詰められており、情緒ある街並みを呈す。ドナウ川とセバ川の合流点に位置することから、古くから交通の要衝であり、とりわけ14世紀末から500年間この地を支配したトルコの影響が色濃く残っている。セルビア共和国の人口は約735万人、そのうち

首都のベオグラード市が160万人を占める。宗教はセルビア正教が主流で、人種はセルビア人が83%と大半を占める。セルビア人の印象としては、色が白く男女とも背がすらっと高く、脚が長いのが印象的であった。

### プロジェクトの概略と感想

今回の現地調査は、セルビア共和国における乳がん早期発見システム構築のための機材整備

を、無償資金協力で日本が行うべきか否かを評価することが目的であった。セルビア共和国内を39の地域に分け、そのうち一次から三次の医療施設を数か所ずつピックアップし、視察を行った(写真2)。その中でも三次医療施設は国のがんセンターに相当する拠点施設(クリニカルセンターと呼称)で全国に4か所あり、ここでは最新のデジタルマンモグラフィーから、乳房温存療法まで行える設備を整えていた。



写真1 NATOの空爆により崩壊した建物



写真2 JICAバルカン事務所所長と現地調査団一行

しかしながら、一次から二次医療施設のレベルは低く、マンモグラフィーを既に日常診療で行っている施設でもX線写真の質や日頃の精度管理に関しては、眼を覆いたくなるようなレベルであった。したがって、本プロジェクトの推進にあたり、ワーキンググループ長には「マンモグラフィー読影医を手厚く育成するのもよいが（聞くところによると、EU諸国でマンモグラフィー専門医資格を得た医師の下で、2か月間の研修を積むという）、マンモグラフィーの精度管理も重要な仕事であり、放射線技師には単なる撮像に終始するのではなく、精度管理の概念を十分習得するよう指導して下さい」、と要望した。

実際、セルビア共和国全体で、精度管理に必要なファントムは2つしかなく、それも全く使用されていない状況であり、根本的に精度管理の概念は無いようであった。したがって、第二次現地調査の際には、私が「日本における乳がん検診の現状と問題点」を、また同行して頂いた大分大学医学部附属病院の村上診療放射線技師長には「マンモグラフィーの精度管理」のレクチャーを50名程の参加者を対象に行ったが、基本的に精度管理の概念のない医療従事者にとって、どこまで精度管理の必要性が理解され

たかは、疑問であった（写真3）。

今回視察を行った一次、二次の医療機関では、1970年代の旧ユーゴスラビア製のX線撮影機器が未だに多く使用されており、写真の質はさて置き、40年近くも同一機器を大事に扱う姿勢（おそらく、その間何度も修理が施されたのであろう）には、贅沢になった日本人も見習うべきものがあると痛感した。現に、街には旧ユーゴスラビア製をはじめ、ドイツ、イタリア、スウェーデンなどの古い輸入車がひしめき合っており、まさに“世界のオールドカーショー”を身近に楽しむことができた。したがって、言葉は不適切かもしれないが、マンモグラフィー機器を日本が無償資金協力で供与しても、セルビアの人たちは少なくとも機器を壊れたまま放ることはなく、長年大切に扱って頂けるものと思いい、供与機材は決して無駄になることはないであろう、と実感した。

今年の6月30日に、日本国とセルビア共和国との間で本プロジェクトの書簡交換が行われたが、最終的に32台のマンモグラフィー機器（うち、2台がデジタルマンモグラフィー、18台がアナログマンモグラフィーにCRカセットを併設）を供与することとなった。

また、ソフトコンポーネントとして今年度か



写真3 講演会前の保健省副大臣からの紹介

ら2年間、大分の地（主に大分大学附属病院、厚生連鶴見病院）にセルビア共和国からの短期研修者を4～5名受け入れることとなった。日本の乳がん検診が啓蒙の観点から見て、世界的に進んでいるとは思わないが、マンモグラフィーの精度管理やデータ管理に関する知識は、十分学ぶべきものがあると思われる。

### アフターファイブ

どの土地にも気候や気質の違いにより、その国に合った生活時間があるのかもしれないが、セルビア共和国にも特別な生活時間が存在した。通常、セルビアの人は朝7時から働き始め、昼の2時過ぎには仕事を終え、その後はカフェでお茶をするなり、家に帰ってシャワーを浴び一休みするなど様々らしい。しかしながら、セルビアの夜は長く、ディナーは9時過ぎからとる人が多く、街中のレストランは7時過ぎより10時過ぎの方が賑わっていた。

さらに驚くのは、平日にも関わらず深夜12時を回ってもベオグラード市内の目抜き通りには人が多い、ことである。店が全て閉まっているのに、ひたすらウインドウショッピングをしな

がら歩いている人が多い。健康のためには良いことであるが、「明日の仕事は朝早いのに大丈夫かな」と老婆心ながら気遣ってしまう。私も、10日間前後セルビアに滞在しているうちに、食事もワインもおいしいせいか、完全にセルビアライフに感化されてしまった。

### おわりに

今回、日本国とセルビア共和国との間で、無償資金協力「乳がん早期発見機材整備計画（The Project for Breast Cancer Screening and Prevention Capacity Improvement）」に関する正式な調印が交わされた。

しかしながら、まだまだ精度管理、標準的乳がん治療の提供等に関しては多くの課題が残される。来年3月から、セルビア共和国で本格的な乳がん検診がスタートする予定だが、本プロジェクト発足にあたり結成されたワーキンググループが牽引役となり、質の高い乳がん検診制度（治療まで含めて）が確立されることを切に望む。機会があれば、またセルビアを訪れて見たいと思う。



## スポーツ振興による国際交流活動

メリッサ・メイヤー (Melissa Mayer)  
大分県企画振興部 国際政策室 国際交流員  
Coordinator for International Relations  
Planning and Promotion Department  
International Policy Office  
Oita Prefecture  
E-mail: melissa@emo.or.jp



初めまして。私は、メリッサ・メイヤーです。  
大分県国際政策室の国際交流員として、活動  
しています。皆さんよろしくお願ひします。スポ  
ーツ活動による私達の国際交流を紹介し  
ます。

### チャリティ バイク ライド

3日間大分や宮崎を自転車で一周しながら  
Room To Readというチャリティのために募金  
活動をし  
ます。

(詳しくは下記にあります。日本語はページの  
下のほうにあります。) [http://jet.wikia.com/  
wiki/Oita\\_International\\_Charity\\_Bike\\_Ride\\_2008](http://jet.wikia.com/wiki/Oita_International_Charity_Bike_Ride_2008)



## ニセコ 旅行

2010年2月に大分AJETの企画で、大分県のALTとCIRが札幌に行って、雪祭り・スキー・スノーボードなどを楽しみました。(注：AJETとは語学指導等を行う外国語青年招致協会のことです)



## バイクセール 大分市（その1）

これも募金活動です。バイクライドと同じくRoom To Readというチャリティに募金で集まったお金を寄付しました。



## ベイクセール 大分市（その2）



## 別府公園ゲームデー（その1）

別府公園にALTとCIRが集まって、いろいろなスポーツやゲームを楽しみました。



別府公園ゲームデー（その2）



# 私の留学生としての生活

ルッキー ルントウエネ  
(Lucky Runtuwene, M. D.)

大分大学医学部感染予防医学講座  
研究留学生  
Dept. of Infectious Disease Control  
Faculty of Medicine, Oita University  
luckyruntuwene@oita-u.ac.jp  
luckyruntuwene@yahoo.co.id



私は大分大学医学部の研究生、ルッキーです。子供の時から日本が大好きでした。そして2010年4月にインドネシアから日本へ来ました。大分大学に留学して、専門の研究ができること、直接日本の文化を体験できること、および、いろいろな国の留学生に会えることは、とても有意義なことです。日本での生活は、今後良い思い出になるでしょう。(写真1)

日本に来る前は、私はインドネシアの北スラウェシ州のシアウ島で医師として働いていました。島へは州都マナドから船に乗って、6～8時間ぐらいかかります。そして船は2日に1回だけでした。その島で働いていた時に、大変に難しい病気の救急患者さんと会いました。その時はいつも患者さんのための最高のヘルスケアを考えていました。(写真2)



写真1 大分大学医学部研究棟



写真2 インドネシアで働いていた保健所

シアウ島の人口は多くはありませんでしたが、島の病気の中で感染症は大きな比率でした。私は大学の医学部生であった時から感染症、人間と病原体との“せめぎあい”に興味がありましたので、その専門をもっと勉強したいと思っ

ていました。特に分子生物学的技術を使って感染症を研究することです。ですから、文部科学省の留学生試験に受かって、大分大学で勉強できることを、とても嬉しく思っています。  
(写真3)



写真3 マナドから船で6～8時間かかるシアウ島

大分大学医学部ではデング熱・マラリア・フィ  
ラリア症など、昆虫類が媒介する節足動物媒  
介病の研究が行われています。先生の指導で、  
病原体に感染した蚊が発現する多くの遺伝子  
を調べて、媒介蚊のコントロールに役立つヒン  
トを探したいと思っています。

私は既に6ヶ月間日本に住んでいます。その  
間、色々な経験をしています。この経験は私の  
将来にきっと役に立つと思います。更に、こ  
れから行う予定の研究が人々の健康に、そして  
専門分野においても、役に立つと良いと考えて  
います。（写真4）



写真4 死んだ蚊を集めている先生

## 大分県JICA派遣専門家連絡会事務局便り

### 連絡会からのお願い

平素は本会に格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。  
さて、会員の皆様にごお願いがございます。

本会はできるだけ多くのJICA派遣専門家の方にお集まりいただきまして、各々時々の経験・ノウハウ等を伝えて頂き、それらを多くのJICA派遣専門家の皆様と共有したいと考えております。

そのため、会員の皆様ならびに関係の皆様へ、ご意見ご報告を本会会報へ投稿していただけますようお願いしております。

また、JICA派遣専門家連絡会の主たる機能となりました「国際協力に対する市民への理解促進活動」のため市民講座等での報告発表も会員の皆様にごお願いしております。

しかしながら先般個人情報保護法が成立しました影響をうけて、法施行後のJICA派遣専門家の個人情報がまったく得られない状況にあります。

そこで、皆様のお近くにJICA派遣専門家で本会への入会を希望されながら、本会から総会案内状及び会誌が届いていないという方がおられましたら、ぜひともお知らせいただけますようお願いいたします。

大分県JICA派遣専門家連絡会

幹事 中山 晃一

# 大分県JICA派遣専門家連絡会申し合わせ事項

(平成14年3月1日制定)

## 1. 趣 旨

わが国における開発途上国に対する国際協力活動の一層の拡充要請、九州及び大分県における国際交流活動の活発化、国際協力事業への参加志向の高まりが顕著な今日、開発途上国で国際協力活動の第一線に身を置いた共通体験を有する我々は、持てる知識・エネルギー等を集結して、前記の動向の有効な発展に質すると共に、県内の現居住地において我々の体験を活用する方途の具体化を期して、本会をここに結成する。

## 2. 事 業

本会は前項の趣旨の具現を図るため、下記に係る事業を行う。

- (1) 政府開発援助（ODA）の進展動向に関する調査研究および提言
- (2) JICA及びJICA九州国際センターの業務遂行の方途に関する助言、支援等
- (3) 大分県と海外諸国（特に発展途上国）との国際交流活動の促進、充実に質する諸活動
- (4) 会員相互の情報交換・交流・親睦に関すること。

## 3. 会 員

本会の趣旨に賛同するJICA派遣専門家経験者

なお、今後帰国し、当会に入会を希望する専門家は、当会に入会届を提出するものとする。

## 4. 会長及び幹事

- (1) 会の運営を円滑に行うため、当会に会長を1名置く。また、世話役として2名、会計役として1名、計3名の幹事を置く。
- (2) 会長は会務を総括し、会を代表する。
- (3) 幹事は適宜幹事会を開いて、所要の協議・決定を行い、会員の協力を得て、第2項に定める会務の執行に当たる。
- (4) 会長及び幹事の任期は2年とする。但し、再任は妨げない。
- (5) 本会に顧問として、JICA九州国際センター所長の職にあるものを充てる。
- (6) 本会は必要に応じ会計監査役2名を定めることとし、総会の議を経て会長が委嘱する。
- (7) 本会に事務局長及び編集責任者を定め、会長が委嘱する。

## 5. その他

この申し合わせ事項を改変し、もしくは新たに会則を設ける場合、幹事会が原案を策定し、総会の議を経て施行する。

以 上

## 付 則

この申し合わせ事項は、平成19年2月2日に一部改定し施行する。

この申し合わせ事項は、平成20年2月6日に一部改定し施行する。

## 編集後記



大分県 JICA 派遣専門家連絡会の会報は、皆様からの暖かいご支援により、14 号を発行することができました。原稿を準備してくださった皆様、そして投稿者をご紹介いただいた小林正博 前 JICA 九州所長、堀 正和様（国際国流プラザ 財団法人大分県文化スポーツ振興財団）、そして、田口正文会員の皆様にお礼を申し上げます。

本号の巻頭言としまして、大分県 JICA 派遣専門家連絡会の三舟求真人会長には、「今年の猛暑に思う」という題で書いていただきました。蚊の写真は編集者が追加いたしました。

独立行政法人国際協力機構（JICA）九州国際センターの村岡敬一所長には、「ミレニアム開発目標 10 年目に寄せて」という題で、杵築中央病院の安東孝文理理事長・院長には、「サントドミンゴの思い出 — 日本・ドミニカ共和国消化器疾患研究臨床プロジェクトに参加して—

赴任年度 1992 年/1995 年」という題で、また、元大分モンゴル親善協会の亀山 哲 会長には、「大分とモンゴル・バヤンホンゴル県」という題で、特定非営利活動法人 大分一村一品国際交流推進協会の安東 忠 副理事長には、「オヤカチふるさと創生事業」という題で、大分大学医学部放射線医学講座の松本俊郎准教授には、「セルビア共和国乳がん早期発見機材整備計画準備調査に参加して」という題で、大分県企画振興部 国際政策室のメリッサ・メイヤー国際交流員には、「スポーツ振興による国際交流活動」という題で、大分大学医学部感染予防医学講座のルッキー ルントウウエネ研究留学生には、「私の留学生としての生活」という題で、ご執筆いただきました。本号も、ユニークな内容になるようにいろんな分野の方々に執筆をお願いしました。お忙しい中での原稿執筆に感謝申し上げます。

また、大分市および独立行政法人国際協力機構（JICA）九州国際センター主催の、「おおいた国際協力啓発月間 in 2010」では、10 月 2 日（土曜日）13:30～15:00 に、大分市コンパルホール 4 階アートルームにおいて、本連絡会講演が企画されました。本連絡会の会長でもある大分県厚生連鶴見病院海外渡航外来の三舟求真人先生（APU 大学院客員教授・大分医科大学名誉教授・NPO 法人ドミニカ・ヒューマン・サポート）による「海外への旅行にあたり注意すべき病気」と題した講演が行われました（本号 1 ページに関連記事掲載）。

今回も原稿には、顔写真・e-mail アドレス等の情報を掲載しました。本誌を読まれた方々との交流が広がることが望めます。また、JICA 九州のホームページ（<http://www.jica.go.jp/kyushu/>）にある JICA 派遣専門家連絡会の専用ページに、本号が掲載予定です。ホームページ掲載を御快諾いただきました皆様に感謝いたします。

大分県 JICA 専門家連絡会事務局幹事の中山晃一会員による事務局便り、および連絡会規約を掲載させていただきました。本会の活動内容をご理解いただければ幸いです。

大分県 JICA 派遣専門家会の会報は、冊子体の体裁を維持しております。これは、会報の発行を支えてくださる会員諸氏および支援して下さる関係各位の皆様からの原稿により維持されています。写真のみ、あるいは 1 ページの原稿でも編集者宛にお送りください。次号の御投稿をお待ちしております。

江下優樹

大分県 JICA 派遣専門家連絡会会報編集責任者

連絡先：〒 879-5593 大分県由布市挾間町医大ヶ丘 1 丁目 1 番地

大分大学医学部感染予防医学講座

TEL/FAX. 097-586-5701

E-mail : yeshita@oita-u.ac.jp

---

---

## 大分県 JICA 派遣専門家連絡会会報第 14 号

2010 年 12 月 20 日 発行

編集および発行 大分県 JICA 派遣専門家連絡会  
会 長 三舟求真人  
編集責任者 江下優樹  
〒 879-5593 大分県由布市挾間町医大ヶ丘 1 丁目 1 番地  
大分大学医学部感染予防医学講座  
TEL/FAX (097) 586-5701  
E-mail yeshita@oita-u.ac.jp  
印刷所 三和印刷出版株式会社  
TEL (097) 596-7700, FAX (097) 596-7888

---

---